

「GIC 第5回ガラス技術シンポジウム」参加報告

ニューガラスフォーラム事務局

Report on the 5th Glass Technology Symposium sponsored by GIC

New Glass Forum



(GIC シンポジウム会場 京大・桂キャンパス)



(近藤 GIC 運営・技術委員長挨拶)

1. 経緯

ガラス産業連合会 (Glass Industry Conference) がガラス関連 6 団体で設立されて、今年で 10 年目となります。GIC の大きな役割は、板硝子、電気硝子、硝子製品、びんガラス、硝子繊維、ニューガラスに共通する技術課題のフォローです。ところで、ガラス技術の交流が、特に、学界と産業界の間で不足しているとの GIC における反省から、5 年前に、産学交流活性化方策として、「ガラス技術シンポジウム」を開始しました。具体的には、日本セラミックス協会ガラス部会主催の「ガラスおよびフォトリソ材料討論会」の共催プログラムとして初日の午後には各回に設定したテーマに沿った講演会を開催します。また、「ガラ討」と合同でポ

スターセッション、研究室紹介、懇親会を行っています。初回の滋賀県立大学以降、東京理科大学、豊橋技術科学大学、東北大学と巡って、今回は 10 月 29 日 (木) に京都大学で開催しました。

ガラス討論会が、記念すべき 50 回目に当たるので、「ガラ討」を主催した平尾一之京大教授を初めとして研究室の総力を挙げた GIC 支援を得て、当日の参加者は約 220 名と、これまでになく盛況でした。近藤敏和 GIC 運営・技術委員長 (日本板硝子上席執行役員) の挨拶の後、山崎博樹副主査 (日本電気硝子) の司会のもとで進められました。

当フォーラムは、鈴木恵一朗企画部長がシンポジウムの事務局を担当して準備を進めました。また、ポスターセッションでは、企業製

品・技術紹介の部で、90万件以上の物性値などを収蔵する当フォーラムのガラスデータベース「INTERGLAD Ver.7」の発表を行いました。

2. 講演テーマと講演者

講演のテーマは、初回が「ガラスの破壊・強度」、次いで「環境とガラス」、「環境負荷の低減に向けて」、「ガラスと表面」と続き、今回は「エネルギーとガラス」のもとで、次の5つの講演が行われました。

①「エネルギーとガラス」(上堀徹・GIC 材料技術部会主査(旭硝子)) ②「燃料電池とガラス」(野上正行・名古屋工業大学) ③「クリンエネルギーを担うリチウムイオン電池-素材の現状と将来」(河野通之・第一工業製薬)

④「太陽熱発電用ミラーとガラス」(櫻井武・日本電気硝子) ⑤「高効率薄膜シリコン太陽電池の開発とガラス」(高塚汎・三菱重工業)。

また、ガラ討第50回記念として、作花清夫・京大名誉教授による「ガラスと水」の特別講演が同時に行われました。

ポスターセッションでは、GICからは、次の会社・機関が参加しました。(1)日本板硝子テクノリサーチ (2)長岡技科大・鶴岡高専 (3)旭硝子 (4)セントラル硝子・(独)原子力機構 (5)日本板硝子 (6)古河電気工業 (7)日東紡績 (8)パナソニック・ライティング社 (9)太陽日酸



(ポスターセッション風景)

(10)日本電気硝子・滋賀県大(11)岡本硝子(12)ニューガラスフォーラム・みずほ情報総研

3. 余話

珍しく晴れて暖かった当日は、新幹線で京都へ行き、JRに乗り換えて3つ目の「向日町(むこうまち)」からタクシーで京大へ行くコースを取りました。この日は、いつものように品川駅内の「なだ万」で買った弁当を、新幹線内で食べそこなったので、向日町ホームの待合室で食べました。駅から京大の桂キャンパスの会場までは、タクシーで15分間です。途中は、何の変哲もない素朴な町並みでしたが、キャンパスのある桂丘陵へ登る少し前の地区で、細い道の両サイドの家のたたずまいが一変したのです。突如、黒い荘厳な瓦屋根の、木造二階建ての古屋、それも、一階部分は細い木の格子で覆われた、時代劇に出てくるような古色蒼然とした家並が両側に現われました。規模ではずっと小さいのですが、30年前に行った木曾路の「妻籠宿」に似たような雰囲気でした。思わず運転手さんに、「これらの古い家々は何なの？」と訊ねると、「ここは、昔の旅籠です。この先から山陰道に入ります」との事でした。向日町には、競艇場があることも初めて知りましたが、こんな所に昔の町並みが残っている事も初めて知り、思いがけなく得をした気分でした。



(当フォーラムのデータベースのパネル展示)